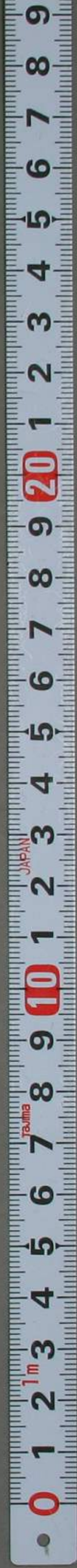


4424  
9





特  
4424  
9

二月

大陽丸が二段

加欠

十二日

廿

神戸

港に泊りて

自己明治文壇史(一三)

新文士の集大成

明治三十年春の上

江見水

神戸又新日報が唯一の新

間紙であつた。古い歴史を誇る、報力も有つ

No.

紙

25

寸ア、探し、何れかおまつしやろと  
 いふ返答ふりて、神戸に入つた第一印象  
~~は~~頗る不快極まるゝ有らん  
 せ所へ、大阿のり、曾て中央で同社してゐる  
 畫家の武田一舟、多分羽根葉舟と云ふのが、東京  
 先づ訪問の事な  
 矢張本誌でしるゝ。寧ろ神戸に新らしく出  
 来る新聞へ、江見水産が毎上むと云ふ噂でし  
 るが、うんふ答はよい。ニセ者が多いと云  
 ふ噂で、寧ろ私か首字檢に来ん譯です。と云

No.

ぬ。世所へ引く新らしく一新聞を起さうとい  
 ふので、神戸新聞と云ふ名前だけは確定し  
 てるらう。編輯方針世に就ては何の準備も  
 整へてゐるからな。  
 先登の屋上新兵衛、事久留島、或るが下山寺通  
 の素人下宿屋に假して住居してゐる。で、不  
 取敢自分と静海とは、其所同居し、家族を連れて  
 東京から移住してゐるとする者に向つて、新聞  
 社と云ふは随分冷然な態度で、どこか借家は  
 無いにしろ、と、岩崎の問うて見ると。

A 10 20 書(三) 新聞雑誌の歴史

士

つね

内情を知りぬ者には 当時中央文壇で

葉露伴に代る大家とまで (諸雜誌より記載)

指上げりぬる水蔭が ~~地方~~ 新聞の記者は

成る ~~言~~ とは誰しも想 ~~い~~ つかふ ~~こと~~ ならぬ

勝田は ~~言~~ 法と誇張ではふかつた ~~社~~ だ (それ

は数日の後、山陽鈴道の若手 ~~社~~ だ

松本晩翠といふ人、神港俱樂部の宴會で會

つゝ ~~言~~ 同様の事をつて号して 男子

の高貴様、自分なげ難洋新兵器の日招待し

A 10 20 巻(1) 新聞雑誌記事

て号する。この山陰若手社員の一人で、矢張

萬能の主人側は列席しぬのが、今の南劇事務の

山本久三郎は、け頃でも如何のそ昔話が出

ると、Pノ時日貴君達か、東京から新知識を

持て ~~て~~ 無らん ~~で~~ 大評判である。

と云つて笑ふのが常也。昔は新文士がツレと

りふ裡面すは、今は老朽作家だと侮蔑されてゐ

る様ふ気がして、~~悲~~ 悲哀を感じる次第で

自分 ~~が~~ 入神の ~~当~~ 宇内川の常盤草壇(当

時第一流の料亭。曾て伊藤公と浮名の高かつ

No.

念

4 I

ので有る。後、それと感銘いかりの、最  
 初は石原とばかり物事を推し進める。  
 何んぞ新聞で儲けたか成り上りの女と  
 神戸言葉で冒頭石原の挨拶「れい、鯉洋  
 と自分とは顔を見合せ。社長の理想が之を  
 りんが、全く残念が持てた、社長が  
 出ぬが、もうイヤ気が差した。と云つて  
 鯉洋とろり自分とろり前借で既に儲けりて  
 るので、如何なる事かあつたかといふ有る  
 ら。

No.

れお国とろりの女将(岩崎は自分達と小宮  
 を聞いちが、翌日鯉洋が到着すると、又常盤寺  
 上り小酌した。  
 勇又数日して、社めて社長とろり石井原  
 兵衛は同所で會見した。石原は兵庫の書封家  
 で、非常な保守主義の人で、それが新聞事業  
 を手を出さしつゝのは、不思議な事とて  
 が怪しんべい有る。(果然それは、岩山子社  
 長で、直の出資者は、川崎造船所)で有るの  
 だが、先づ一年は石原の名義で進めさせよう  
 と。

A 10 20 青い 三つ線紙

カカ 雅ふる 関西文壇

明治三十一年の春の中

四五

下山手の素人下宿、十疊ばかりの大廣間、  
鯉、新兵衛、静海、など自分の四人が同居  
し、全く学生生活の姿取りをくわんで有つ  
た。

神戸の事情に通じる者と稱して、新聞発行  
所の校目を四人でいそがしく廻つた。

興は自分より年下で有つたが、十カ〜

A 10 20 第三 新聞雑誌記事

一七

人物はシツカリしてゐた。細事を願ふが、大  
体系統は行くところ、東洋幕僚の型に就つ  
てゐた。そのが又雅氣な人である。自分  
とは非常な意氣が合つた。大学漢文科の出  
づから、政論の文章などは立派なもので、しるし  
軟文の理解は有つた。

矢張り東京で借金あつた、それを得ず都  
落をくわんで、よく債をいふ借債があつた。  
すゝと封をゆるがせに自分も借す。その借  
金の催促はゆるがせに、おのれが借金する

No.

6士

てくれ。他は変わった事があるかも知れなく  
れといふのが有つた。自分も亦同じ事  
を依頼して、借金手紙は五りの請ひ合を  
しつゝの。

二月十一日、紀元節、第一號を發行  
新聞の経験有る者は、静養と自分との間で

兵衛と全くの素人。それは小学校の教員より  
で小野棟花といふのが、こゝろ編輯の一人。そ  
れは刑事上りの谷半白といふのが探訪主任。

A 10 20 幸山 三四郎探訪記

その他ニ三人の探訪員、それだけおれ、我  
等二人は非常な骨が折れん。それは自分は毎  
号小説を書かふけれども成る事おつた。

その当時の関西文壇は、中々問題が成るな

程幼稚なもので、強々新聞小説と書くと、木

の字田川文海や、假名垣魯文の書いた草紙紙

程のものが、澤山有つた。(大阪朝日の西段亭

とろり大甘紙を書き、大阪毎日の幽芳が、問

もふく、乳兄弟を出しかけた頃、現に對

於新聞の神戸又新の小説を見ると、明治

No.



士

よ於ける新聞講義の元祖古川魁菴子が存在

してゐる（この人の事はある指）お倉敷騒動

物を旧式の筆で連載してゐる、そのが又非常

の評判が好いと云ふ有様あり、<sup>ウツガリせす</sup>自分は直幹

岩山とも相談して、矢張大甘の時代物を書く

事、<sup>いふ題下有</sup>その日、<sup>と</sup>初男、<sup>と</sup>うん

自分等の西下より少し前、角田浩之雅閣

<sup>の</sup>大阪朝日に入社してゐる、<sup>の</sup>そので早速

~~彼~~彼のり手紙の事、<sup>の</sup>關西文壇の現状は中

々お話を成る、<sup>の</sup>お互ひの之は對策を講じら

A 10 20 第 11 回 新聞講義

けいば成る、<sup>の</sup>——と云ふ意味が書いて有る

それら等して自分返書を出して、<sup>の</sup>そのを直

ちよ、<sup>の</sup>大阪朝日の短評欄、<sup>の</sup>天声人語、<sup>の</sup>浩

之は、<sup>の</sup>載せし、<sup>の</sup>神戸、<sup>の</sup>水産、<sup>の</sup>關西文壇

~~の~~の不潔を嘆き、<sup>の</sup>書では、<sup>の</sup>仕方が、<sup>の</sup>何ん

此の成る、<sup>の</sup>と云つて、<sup>の</sup>全く、<sup>の</sup>何ん、<sup>の</sup>のし、<sup>の</sup>さ

けいば成る、<sup>の</sup>——と云ふ意味で有る

~~の~~の、<sup>の</sup>大阪を根城として、<sup>の</sup>幾度となく、<sup>の</sup>文学運動は

試み、<sup>の</sup>仰子、<sup>の</sup>霞亭、<sup>の</sup>好尚、<sup>の</sup>秋清、<sup>の</sup>枯

川、<sup>の</sup>其他の、<sup>の</sup>あ、<sup>の</sup>ほ、<sup>の</sup>ほ、<sup>の</sup>文学雑誌、<sup>の</sup>小説

No.

ア士

秘窓 (今) 秋双 月斗 (青木) 鬼史 (松  
 村) 青々 (松) 等の名が見えん。それの  
 身は、  
 何んぞとて、大体は於て文壇は之を推ぶるに  
 自分には、  
 法として、  
 道に寄るを、  
 毎週「神」文学の、  
 月刊「岩山」へ相認し、  
 それに直ちの発行されん。

若い人達の集まりで  
 関西青年文学會  
 の、  
 と同じ同人雑誌が  
 発行され、  
 それらは文庫にて既  
 知である。河井  
 醉茗を祀り、  
 大毎の、  
 当座前の中村春雨(寺)

を主として、  
 西村醉茗(道次)  
 幹部を有つる。小林天眠、  
 その他は金屋文楽堂を中心とした文楽會  
 の、  
 但し、  
 高須梅彦(大)

A 10 20 青山 四國新聞社

9 ±

文筆労働の激務

明治三十一年の春の下

神戸新聞の第一号発行の夜、兵庫の常盤草  
 壇で祝賀會が開かれた。その時の産順、新田  
 静海を廣告取次人の下座に据えんとする。で  
 五軒岩島の無理解を憤り、静海は聞ふく退  
 社して帰京せん。  
 その静海が志す少しあり、自分の一家は  
 斬くして内頼を引拂ひ、愚妻は老母の供として

A 10 20 青い 川島藤花記

No.

て神戸へ来た。天仙の同行の筈が途中を用车  
 が下りて下車した。  
 見ると愚妻は、不断の衣履で（コートもふ  
 く、シヨールもふく）おまけに麻草草履を  
 穿いてゐる。で、自分直ち内頼引  
 拂ひの苦戦。  
 獲とは能りのシミツタレ、出へる来て  
 号れん社の人の對して赤いセリはるるの  
 ぶかづんが、この草履は汽車中で下駄を塗き  
 れん結果と知れん。

念

種の木が多く、  
 有つるが、  
 山は他は種々  
 後は知らん。  
 此所は毎日、  
 此所を東中の念入んで、  
 田圃路大倉山の種々有名な、  
 宇野野村落を掃けるも、  
 不浄な狭路を、  
 静けまつてのり、  
 天仙を知ずとて、  
 二百分の縮小、  
 小説、  
 雑誌、  
 文学欄、

植まるる田子花の絶えず

No.

ま  
 家一軒の見えるのつん、  
 度は各  
 二三日を、  
 密の市街地を成るるる、  
 時分は、  
 二階より田畑を一目で、  
 山田大倉山、  
 下野野村落を掃けるも、  
 不浄な狭路を、  
 静けまつてのり、  
 天仙を知ずとて、  
 二百分の縮小、  
 小説、  
 雑誌、  
 文学欄、

A 10 20

到頭

11土

見下が果てて用がとくく様ふ文言で  
 月餘を既に之  
 紅葉は激怒した。一それ程品行を慎ま  
 事、け事を小僧が得て紅葉は語つた。此  
 の有つた。上方の所謂措子酒ふの心。  
 兵衛三人が一夜の間は三ヶ所で歓遊宴を開い  
 と、<sup>正式な</sup>半信川の半信草土<sup>で開き、其後</sup>。此の歡遊宴は、社  
 入り寄つてせう<sup>ふ事</sup>。その歡遊宴は、社  
 間もよく小僧が聞西へ来た。是非神戸  
 彼は三人を  
 社への紅葉者  
 ぶの心  
 No.

海熱、角力、殆ど一年で書きのめ  
 す。自分も昔々てけ時位の勤勉一文  
 筆、筆の劇務は当つた事は無いの心。  
 此位東京で勉強して、何と神戸へ落ちた。  
 く、後悔か、つらりと後悔せざるはるる心。  
 どの、東京へ帰りた。それより他は  
 念頭には無かつた。毎日鉄道の踏切で新橋行  
 の汽車を見るとき、一人も乗つて帰る心  
 と、思ひ、日とを無いのを有つた。

A 10 20 書 記 録 簿

12+

糊と鉄との奮闘

明治三十年の春から夏へ

鯉洋は誰かの紹介で、韓藝士櫻井一久の処へ  
 能く遊ぶへ行つた。自分も鯉洋の引合  
 日さかん。神戸で櫻井一久と云へば名物用  
 金田出身の豪傑で、友人の逸話は多い。  
 後年代議士押出さんの友人は三宅雪貞、陸  
 稲南、或は天田忠庵知事など、  
 立派な国士で有つた。又一ボーエである  
 何処か見ると

A 10 20 青山 印刷局蔵

て、それで ~~人~~ あり通じてゐる。(澤田撫  
 松は以所の玄關書で有つた) 其処へ、福本日

No.

南の、香川怪庵の能く立寄つて、其處を  
 其の ~~人~~、その處を我等は招かれてゐ

岡山行の  
旅途

鯉洋の処へは田園風景が、立寄つて遊んで

る。自分の処へは早速田山花伝が訪ねて来

た。そのは、志摩、甲斐等の旅行を終へてから

下、その旅行は徳の、南の北馬、とある。終

り。(その後、花伝の紹介で、柳田国男) 其處は

山

105

松岡健一) 足を締めてるん。

~~松岡健一) 足を締めてるん。~~

〇〇古銭夢の(今は映画監督の元老) 社へ  
おてまね。 同(はニコレイ神学を抜出で、その文士生活の、新劇界へ)

新派俳優野崎三郎、児嶋文衛、酒井正俊、熱

海孤舟考の一巻の作者として、楠公前の大黒

砲へ掛るゝ就て、二巻目新脚本を一つ書

いてくれと頼むので、悪水去とらふ信憑を

三巻目を掛ける。

その新々自分の海の新脚本を、新脚本を

A 10 20 巻目 新脚本を掛ける

試次郎

藤澤一巻の脚本を、それは誰か、脚色

しんが、おしげま見お行おのつんが、今

度お急な脚本として筆を下し、その初め

て上演されるので、非常な嬉しいわ。

新聞社とて、好い宣傳をして、引幕(幕)閉

~~新聞社とて、好い宣傳をして、引幕(幕)閉~~

け一巻は引つぱり興行して、俳優連中

とは大分親しく交際するん。

社へは長井金風(行)が入って、舞臺を飾り

る権を握るんが、自分の方では天仙が報いて、

おのり者だ

No.

阿波徳島の飛鳥、新俳傳三本新一の一巻を八  
つたが、唯一人で三百五百の二頁を埋めよ  
うな成るふかつん。

それで朝出社（早）と小説を一回書いて、それ  
の糊と鉄とで、東京新聞の地方新聞の切  
接を、一々修正を加へ、正午まで、それ  
を終り、午後三時頃まで土地の雑報を  
埋め、警察事務の少さい時は、豊穡  
其他を執筆して埋め、その後、寄書  
の送達、俳句、遊戯録の送達、芝居がそれ

A 10 20 春に 川原野新聞

は、劇評、相撲の時、は特別の早く雑報を録切  
り、取口記録を駆付け、風を、實際我

社会杯の

No.

右の、驚く程の奮闘をつゞり、有つた。（芝居は  
大塚俳傳の他、市川團十郎の著。筆力は、東京小錦、大塚、雨横、細、常陸山は  
助舟と、東京、一時生田、荻山人が来れ  
時代）

けれど、当時の新文士は全く無理な文筆が  
働ふが、間もなく志すの已むあきに至つた。  
それで自分唯一人で押通した。休暇も、大  
祭りの他は無いが有つた。おきける岡の  
月給は、静謐志り云仙志つた、八十円は下げ  
られ、其内、お借の方へ十円差引られる



ハ

無上な東京が恋しくて耐えられぬのつね  
 どうしてかして東京へ帰るだけの金が溜る  
 と思つても、他にそれを求めようが無い  
 その希望は難しと新兵衛と皆同いので、世の上  
 海発行の留札を居留地で暮らす  
 一ヶ月の間に一枚買つて、三ヶ月の  
 りの暮らぶど見れ。ヤケ酒で頭脳は荒れ  
 だ、いつの間にか立派なゴロツキ新聞家  
 成下つてゐる。(岡本の梅園で土地の酔漢が無  
 禮なことをしつゝ、社員数名で袋叩きする

No.

りで、家計の苦しさといつても無い。内  
 頼の貧乏は能給が有つたが、神戸では  
 上の多忙な貧乏で有つた。  
 小説は、初舞台の引つゞき、毎回男  
 とりふ志願冒險。そのほか、金剛の  
 こと、いん。 (世他の短編は零す) 句海  
 らん不譯で、中々中央文壇へ、文学的價値  
 の作品を送りようが、益々自分は埋める  
 一方で有つた。これは、~~地方~~新聞の記者と  
 して一生を終るにはあるまいと思ふと

A 10 20 書 山 川 海 水 浴

16

事々、其後の機軸で、大辰の乾漢と衝突した事  
や、此種の暴力運動も少くなく見られた

陪觀記者として

明治三十年の秋から冬へ

明治大帝は統帥の下に、野口陸軍三個師團の

以松に入つて、播河泉の大演習が開始された

の陪觀記者として、新兵衛と自分との出張す

る事になったが、東京からは小林天祐(万朝)

五木椿園(中央)大谷誠夫(都)

甲子郎(東京日日)世地の膝掛けを有つた。其中

A 10 20

は自分の地方新聞記者として、其の無勢力に入  
つてゐる。洋服嫌ひぶりが、~~氣の毒~~ ~~氣の毒~~ ~~氣の毒~~

の細紐で袴の股立を雨り、草鞋、脚半といふ以

ふ物装束(外套無し)おろける最後の日の天下

茶室では雨は降らぬ、茶と茗茶とを著

るの、一、外国武官も大勢あるが、田原が

一と云つて、ブツ、云つた東京記者も有つた

箱。第二日の博覧の、一、茶を奮發して

し、し、汽車は、混雑を繰り返して

納つてゐると、大阪朝日の西村天因と箱野年恒

箱

17 七

との二人は、同下宿を兼ねた。けれども、  
~~互に知る~~ 同士のりで、世日は過ぎるが、  
その双方で知れり時よ。

あの江見ヒツシの。俺は隆観の草紙か  
と思つた。と天囚が云つた。話を年恒の

義弟の植田恒房から自分は傳聞した。白切符  
の事、袴、笠組の膝立ちといふの威かたれん

のりと見えん。(然し)ふ折杖をすれば華紋  
と見え、当時の風潮を偶ふたる之を記す

この海習を行く。福井の新聞ある間

A 10 20 幸ひ 日記 日記

戸信園を呼んで助手とせん。同人は読書  
の旧社長子安山の甥とせり。同社で長く校正係

をしてる。菅村翁の薫陶も受けて居り、筆  
は即ち達者なり。非常な自分助のいん。

小説は一日も休まず、活字の活字と執筆し  
て日新供養の心、恋心師といふので三十

一年を打替りん。

三十二年の初摺を出版し、就ては、  
活字が競争で、東京の諸文士の取寄せん。

この他は、自分が東京へ送つた原稿が漸く

187

三ツ有つた。

一ツは春陽堂の『山形の定期刊行』(雑誌と

単行本との中間)と『梅二輪』と『題下

』、小波の『新徳五位』(其の『旅商人』と『ふのそ

載せらるゝ』(三十二年九月発行)一ツは『雪の宇治野』

と『ふ』小波の『之は』(『下陽』)と『載せらるゝ』一ツ

は『題下』の『ふ』で、『文藝』の『俊常』部へ『載せらるゝ』

川上孝二郎 来る

日明は三十二年の新春

新筆のりは『空中飛行器』と『ふ』小説を指

A 10 20 東京 川上孝二郎

載し始め。『飛行機』と『器』と書くけど、其方の

知識は『幼雅』で有つたが、その『其時代』

では非常な新らしい題材として『歡迎』された。(『おやく日本』

『その』並木洋華の脚色で、大阪の『浪花』で

高田小織等の『成美園』の一役を興行した。それ

より『東上』の『俳優』の『一』の『挨拶』の

く、自分も又別の『その』の『おやく』

(『後』)高田は東京で『興行』の『おやく』

無断で有つた。『人下』の『興行権問題』が起るの

『おやく』

おやく日本  
飛行機  
小説の最初  
の知識

No.

# 士

奴、或は息子と云つてゐる。真奴とは洋行して  
 てゐる。同業して遠州の難航路を、兎も角  
 無事神戸まで来たのが有つた。  
 それを福井英兵衛の旧情を捨て歓迎して  
 相生社で合同航を海に成つたのが。川上  
 としては神戸の興行の失敗しては、いさ  
 立つ程がふく成るが有つた。  
 自分はbyの頼するやぬの、酷く川上の同  
 情。それは自分の現る地方へ出を苦んで  
 る。誰の困るのと同ド心と思つたものを有

No.

一月の神戸劇壇は却々花々しい。大  
 黒座の山口定雄一派。相生社の子福井英兵  
 衛一派。川上吉二郎一派が有り加つた。  
 有つた。  
 川上は東京で三芝子破りて、ヤケ気味で  
 果敢に後者を繰ると云つて、片組やぶど  
 たり、悪く東京諸新聞の同情を失ひ、狂人  
 扱ひのさうしてつた。その結果北所を海  
 求りてゐる。無謀の企ての、ヨット  
 の妻の真奴(真奴とはあか云ひよつた)の  
 万朝の毒筆で、  
 鬼藏殿の

A 10 20 善心 川上英兵衛

20士

〇れは萬事を命じて、川上の記事を他社よ  
 リり多量に掲載した。川上は非常な喜んだ。  
 一書目は弦齋の小説を藤岡柳香が脚色した  
 〇 〔原東半島 〇 三国干渉で退却した〇を憤慨し  
 て軍人が切腹する。〇その征卒が遺志を受け  
 て帰郷して遺族を慰め、御堂下 臥薪嘗膽を説  
 くといふ大伴の計略、その征卒の兄が悪人で  
 殺人をすゝめ、無諱大甘針。それの中  
 幕が、櫻痴居士の 〇楠公の 〇櫻痴の 櫻井の 〇  
 有った。

No.

〇ん。(そのころは川上柳香が在りた) 〇ん  
 け頃自分の家、  
 〇る青年が有った。それは加島で誠意の御堂下  
 〇で、福井一砲を有る新俳優、曾ては 〇徳島  
 で能頭として有る三木新二(大澤の 〇行) 〇ん一  
 〇(〇) 〇名は 〇後(〇) 〇二といふので有った。志摩  
 の者ぶりが眼水と競った。英語は達者 〇を  
 〇の 〇が 〇を 〇界に持どれたが、足と洗ひ  
 〇い 〇い 〇い 〇い 〇い 〇い 〇い 〇い 〇い 〇い  
 〇の 〇有った。  
 〇長兵衛氣

A 10 20 善心 川上柳香

21士

一燈、福井派、探澤恒造、松本政雄、野

崎三郎、あどがらん。川上、~~野垣~~のあどがらん、~~山本嘉一~~、~~高浪~~、~~野垣~~、~~和田~~、あどがらん。

助、山本嘉一、高浪、野垣、和田、あどがらん。

真奴はあどがらん、成り、うんて、全然その氣

は無かつらん。

土地の顔役、大花、中久、熊卯、あどがらん、

川上福井の仲直りを祀して、二人は、~~一燈の~~引奉せ、~~あどがらん~~

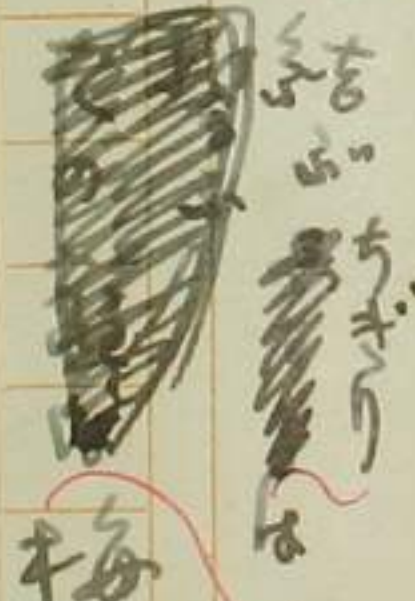
れい、あどがらん、何か文句を書いてくんと依頼するん

で。

ふく井の水や川上の、何どいれを、

A 10 20 春に 川上福井派

2文は、



梅柳、いつれんや

兄弟や。

それ、川上が、一番日では弟の従軍で、福井

が悪黨の兄。中幕では川上、~~兄の~~正成で、福井が

正成。いつれんや、弟や、利いて、あどがらん、好

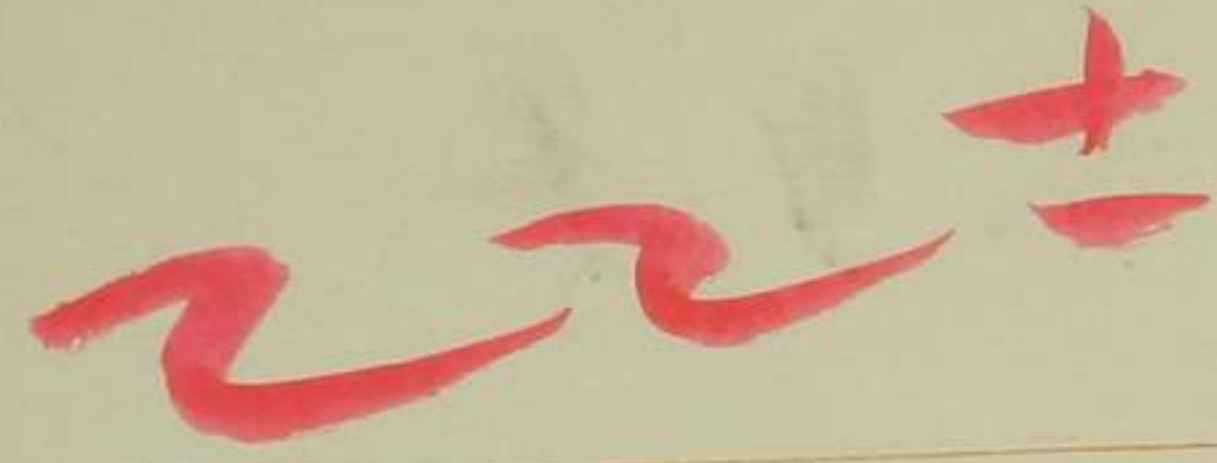
評で有らん。

記者刺の悪評

明治三十三年の春の上

神戸新聞の一年、~~際と、假社長が、~~、~~あどがらん~~

No.



見折の中川上吉婦、福井、深江、山本、  
 藤川其他の新俳句の。其前川上福井の  
 梅氏兄弟より我々の方が巧み、といふ意氣  
 で、鯉舟と自分とが海どれ、其の草紙の  
 ね。  
 大朝の  
 それを又、神戶の通信の、本社へ報告せん  
 の、早速、大朝朝日上の新評が、出せん。  
 (前号) 水蔭は始終大盛、  
 貫目確い見え、いん▲鯉舟と執筆、梅三郎  
 後敵の問謀と捕へて花道、一日の當場

松方幸次郎の社長、(名乗りを擧げ、) 其の故せん。  
 一周年を祝賀して、芝居、了、了、了、了、い、い、い、い、  
 といふ冗談の、お出で、当日、神楽俱樂部の  
 演舞場で開演せん。(けいふふの、島山島山は退社せん)  
 一番目は自分の書記せん、  
 福井、梅三郎、中幕  
 二番目は新宇都谷峠、大切、五人男、  
 三番目は就巻三郎の父、  
 梅正成、鯉舟は、  
 尾三郎、梅正季、信國の茶、  
 偽指摩、  
 裁判長、其他で有  
 せん。

A 10 20 春の川上福井新報



士了

てるんが、少〜自分(夢)は、夢のふりつ  
夢が、待たせぬ。よし、草山を見ること、  
中村春雨(吉野)が、躍起と成る、戦書文  
士(劇)を演習するは、悔し〜ん、と、  
可成り長い政撃文を掲げてあるが、何ん  
の裏印〜ん、様々、心持を金、びり、有る。(其  
中村吉野が、今日では劇作家の一人ふり  
同人として若い間、劇の演習をしてるん、  
は、最少、イタ、即〜ん、脚本が出来るん、  
と、~~自分~~ 自分は常に惜しんでる)

No.

おるを何〜ん、肝腎の白〜ん、と、  
日、突立ち、眼を白黒して、  
うふ、大芥〜ん、(下界)  
夢が、夜、宴會の席で、松方社長が立つて  
新任披露の挨拶の後、  
鮮〜ん、新聞記者、  
河原を食の道、  
て、  
責が、  
その当時の社長格の人のふりつ、  
又松方、  
A 10 20  
意味で

24士

関西青年文士會

明治三十三年の春の中

21

神戸新聞の文藝小品の新作句を授書する青年文士は、大概又関西青年文士會會員である。その中で神戸支部第一例會よりふりや二月十九日午後五時より花隈町の地裁堂で催す。その日は、自令は觀水と連れて出席する。その青年文士の名は、一色白浪(故)平忠宣、松田琳雨、吉田桂舟(笠雨)、野間月

A 10 20 書山 三三三三三三三三三三

桂、智積寺愚念(故)其他十数名で、大阿の

は、中村春雨(世の素人)

世記事の、おしや(草)第拾貳號に出る

る。それは餘りの自令を奉り過るゝある記事

で、~~その~~其時代の既成大家と新進文士と

の距離を見る一例としてたに挿萃しん

(前畧)長軀疎頭眼鏡をさうりと輝かせ

るは、そのを大阪支部の首領中村春雨君、

(中畧)時や例會の期迫る僅に五分、而

り出席者三分の一は先んず所謂神戸時局

男

No.

21-1

24

号6

の我會日まで感心染せんとすやは愛てや、  
 程なく臨席せりしは、これぞ今日の正實、  
 東都文壇の名声、清々たる硯友社の老將、今  
 は神戸新聞の壘を構へて、開西文壇の霸權  
 を握り給へる、江見水蔭先輩、(中畧)  
 最後、起ちしは水蔭先輩、懐くか、如き唱  
 米の裡、又、述べ、徐う、文学會其年の  
 性、竹、より、説、起、して曰く、文学の集會とは  
 文士のみの會合を意味する者、は、す、り、ず、  
 要は文壇の中心、あり、文學者と文士との和

A 10 20 著 山 田 國 雄 氏 著

号6

合、は、あ、り、ず、(中畧)は、こ、こ、を、こ、こ、小感情の  
 な、り、會、員、の、和、合、を、欲、が、ぶ、り、よ、う、と、の、注、意  
 を、賜、ひ、(中畧)水蔭先輩の説、は、依、り、演  
 壇、を、撤、し、會、員、は、圓、形、の、陣、を、構、へ、儀、式、的、儀  
 祝、會、は、最、も、樂、し、き、家、族、的、談、話、會、と、な、り、ぬ、  
 會、員、の、祝、詞、は、一、齊、に、水、蔭、氏、の、集、り、東、都  
 文、士、の、出、立、を、問、ふ、者、氏、が、開、西、文、壇、に、於  
 け、る、功、績、を、尋、ね、る、者、或、は、語、の、定、義、を、執、  
 て、教、を、乞、ふ、者、(下畧)  
 け、席、上、で、自、分、が、驚、く、ん、り、は、鏡、花、の、人、氣、の

No.

野

26 ±

田笠雨世他が發起して四月三日の大祭日、  
 関西文学同好会とらふり、垂水海岸の櫻井  
 一久の別荘旬日庵で開く事を成つて、  
 昔も出席しん。

旬日庵とは、最初ホンの海水浴の脱衣場  
 として建築し、  
 一久式は命名したとらふ。自分  
 達以外には度々来るものがある。今度の會は  
 併し澤田撫松の肝煎ふりも有つた。

この時いろく遊戯を試み中よ、俳句レース

No.

盛んふ事で、若しその心氣葉の玄關まで有つ  
 らんども、少しも知るものか、  
 其れが鏡花を一層尊敬するものも有様  
 で有つた。

わがが一年の間は鏡花の讀出しに、  
 又自分が反比例の世間や、  
 考へるもので、いざ東条へ帰  
 り、  
 このおしき草の幹部、河井醉茗、中  
 村春雨、中村子すい、  
 一色白浪、吉

A 10 20 著 日記 櫻井 潤

27 士

成美園一巻で有る。其次が又水の鏡術  
 といふのを書いぢが、この評判は如何せん  
 斯うして自分は十七八月ノベツと神戸新聞  
 間には小説を書いた(其他短編を数種)  
 磯草水の橋樑が遊ぶる事。甲斐驛を過り  
 水去生活を止して寄食して有る。その水  
 がある。如何して自分の知へは食料が絶え  
 ずある。  
 川上の洋行日記は成つた。その間  
 随分困難の事あり、一巻を連らて完結した。

No.

といふのが最も振るゑる。  
 その後はレースで到着する。其時、休  
 みの議題が思案の休せである。即ち  
 て又入走りある。早くて作向がハマイの  
 勝で、審判は難儀と自分と有る。  
 貞奴の袖舞甚だ  
 明治三十三年の春の下  
 汽車の大賊といふ小説が当り、この  
 又大阪で無断で開演した。高田喜喜村の

A 10 20 書 川島野村

士

路ヤ、丹波路ヤ、目立ちる小劇場を打つて  
 してゐる。

明石の小さな劇場を、台湾鬼退治の  
 見

山高德のまゝ、道成寺を出した。一宿は

藤川、山本野垣、高根和田、まゝ福井の

借りた三上、丸山の二人。まゝの真奴と  
 娘

の鶴子とで（今は早川雪洲の妻）鶴子は正  
 増て

行の役で当てるのが有る。

道成寺は真奴の出し物で、これは洋行の

下巻古と目玉へるのでも、一ヶ評は、暖水をワガ

A 10 20 第三 川原野日記

く、明石まで遣つて見物して書かした。そ  
 れが、神戶の載つたので、川上は、夏夏  
 の引  
 倒し、あんなまじつ茶屋は、殺生です  
 と、愚痴を言つた。

川上は、暖水の茶屋の連者ぶろを見込んで

洋行の車で行きまゝいと、自分まで申しんが。

自分は能りの賛意を表せよのつねで、其儘

で成つたが、福井の譲らした三上、丸山

完善の二人は、米国で病に  
 不幸

三上は同志社の学生であつて、バイオリン

No.

29士

州日報の筆として行く事になった。  
 足水は其方の附いて行く事になった。  
 神戸には、文学士武井悌四郎が入ると  
 筆と成つた。兵庫の~~武井~~、恒厚ふ人で、記者  
 には向かいあつた。  
 志賀老蔵といふ新聞記者の古強者が入社し  
 て、~~武井~~、この武井は大分意地悪くさ  
 りなやつだ。  
 自分は神谷を小説の擔任を休養させよう。

No.

ちびりおつてゐる。丸山は元素、水野好美の  
 門弟で、水野の内縁の妻、新橋、藤、玉の家、茶  
 次、此の居候である間、茶次の妹のぼん太  
 と、マ、ゴトの様ふ恋は落ちたのであつた。  
 このは、大変、鹿嶋、大、相、いふので  
 丸山を大阪の婚しと、格で、福井の手元  
 へ預けられた。有る。  
 後どこは、娘形、十かく、活潑な性  
 質で、何んぞ、~~選考~~、少年である  
 人を結したと、刑、有る。

A 10 20 書山 三河原

104

急いで帰神した。  
 空地見聞の被害記事の他は、鑑夫の  
 恋山とく、短篇小説まで書いて、勉強振りを  
 示した。その鑑夫の恋山を工場の方で  
 組読するに前後さうなりと其儘印刷した。  
 自分はさうを單に、正誤の留め手、全部再掲  
 載を主張した。岩崎が口をきいて中止さ  
 した。  
 自分とくは、秋楓が仕事からいって、人  
 が被害地の危険を犯して、夜の日も夜も、材

No.

29

川子銅山の被害記事

明治三十三年の夏  
 二八  
 林

事、成る。佐吉の山下雨花とく、門下  
 同様の者の小説を代りに出す事とした。  
 八月二十八日、伊藤の川子銅山に  
 山海嘯の有る、全滅の村落もあり、死傷者は  
 無数だと、いふ電報が入った。早速自分が  
 特派される事になった。  
 同業者として、大阪毎日、大阪朝日、その  
 ほか、時事新報、毎日、新片瀆を根據地として  
 活動してゐる中で、健脚を生命として、大破壊  
 の銅山と取返して、機軸の材料を取ると、大

A 10 20 青い 三 四 五 六 七 八 九



士

料を蒐集して書かれた。組織へは工場長の肩  
 を持つ。再掲載の中止を命じたのは、文士を侮辱す  
 るの程度であると、奮然として辞職を叫ぶ社  
 員もいた。  
 背水の陣を張った。  
 それで第一日、最社の新社者たる小島三郎  
 君が、早くも早退してしまふ。二年  
 間、君が能く我慢を耐えて来た。今は、早くも破  
 綻する。皆東京では勝期とあるが、  
 神戸に於ける努力は、一回認められている。  
 て有った。いよいよ気が強く成った。  
 社の方からは、幾人か来て、復讐を勧告し  
 た。松方社長が、お会いを申し出た。断  
 けられた。  
 然るに、久し振で、落附いた気分では、作  
 品も、有った。幸い、山陽新聞と、京  
 都新聞の、双方新聞小説の依頼が有った。  
 で、前者は、地中の秘密を、後者は、秘  
 密世界の、然るに、文藝復興の、  
 秘

No.

A 10 20 第 10 回 山陽新聞社 雑誌

料を蒐集して書かれた。組織へは工場長の肩  
 を持つ。再掲載の中止を命じたのは、文士を侮辱す  
 るの程度であると、奮然として辞職を叫ぶ社  
 員もいた。  
 背水の陣を張った。  
 それで第一日、最社の新社者たる小島三郎  
 君が、早くも早退してしまふ。二年  
 間、君が能く我慢を耐えて来た。今は、早くも破  
 綻する。皆東京では勝期とあるが、  
 神戸に於ける努力は、一回認められている。  
 て有った。いよいよ気が強く成った。  
 社の方からは、幾人か来て、復讐を勧告し  
 た。松方社長が、お会いを申し出た。断  
 けられた。  
 然るに、久し振で、落附いた気分では、作  
 品も、有った。幸い、山陽新聞と、京  
 都新聞の、双方新聞小説の依頼が有った。  
 で、前者は、地中の秘密を、後者は、秘  
 密世界の、然るに、文藝復興の、  
 秘

了二士

子加けうてある。  
 この時乙羽やうり小波やうり、東帰に就て  
 いろく、親切なえつそくめん。知が乙羽の方  
 ぶは、近々、週間新聞、右平洋、を博多館から登  
 刊するに就て、其方へ自命をとり、腹が有り。  
 又小波の方では、近々洋行するに就ては、少年  
 世界の留宿をとり、胸が有つて、うり、そ

No.

若心の作として、旅行者として起稿した。  
 け時、幸ひより東京より、大橋乙羽と巖谷  
 小波と、前後して関西の事遊した。  
 日鏡臺の、おやうり抄、よ左の如き記事が  
 出た。  
 ●大坂の文士  
 須藤南翠、其地、物芳  
 角田浩々、著、諸氏は去十四日（訖）曰く十月  
 ？、同市、築地多景樓、小竹延を張り、西遊、帰  
 途の大橋乙羽、京都滞在中の、巖谷小波、  
 神戸客遊の江見水陰三氏を招き、乙羽子の

A 10 20 書 川 田 園 園 園 園 園

# 了文

編輯の事は坪内水成が編輯長で、山岸上竹軒  
 三宅青軒、上村左川、鳥谷郭春、外田常雄、松原二十  
 三階堂ふとがゐる。高橋樗牛もゐる。天竺は  
 新文士 ~~〃~~ である。田山花袋も乙羽の好  
 意で詩人では有り得る。仕様が ~~〃~~ の  
 子ア入るるは ~~〃~~ といふ細子で ~~〃~~ 川の  
 み ~~〃~~ で中世の世帯 ~~〃~~ 五六日東京の後 ~~〃~~ 自分 は精神 ~~〃~~ 乙羽 の便りを  
 待つる ~~〃~~ いぶ 十二月 ~~〃~~ 成 ~~〃~~ 正式  
 日博文館 ~~〃~~ 入る様 ~~〃~~ 通知 ~~〃~~ 其 金 ~~〃~~ を得ん

No.

返り咲の樹  
 明治三十一年の冬

此は侍し、どちらの秘密ふりか。その秘密を  
 自分は両方から打明けりてゐる。どちら  
 からも秘密は守りてゐる。一寸困つ  
 る。有らん。  
 十一月に入ると自分は、旅役者 ~~〃~~ と、鑑夫  
 の恋 ~~〃~~ との原稿を携へて、二年目で一寸上京  
 した。前者は ~~〃~~ 文藝 ~~〃~~ 後者は ~~〃~~ 古陽 ~~〃~~  
 引取つて置らん。  
 長谷川天来と ~~〃~~ 言書のと交はし ~~〃~~ 確 ~~〃~~ か ~~〃~~ け ~~〃~~ 時 ~~〃~~ が  
 最社で有つんと思ふ。

A 10 20 書山 三田原 徳記 徳記

怡彦その頃神戸はベストの流行中で有つん。其中  
 で殆ど夜逃げ同様にして奥平野の山を引拂  
 つん。その事柄は就ちいふく奇談有る  
 が總べて界して一家が神戸驛の汽車に乗  
 る。その汽車に乗る時の嬉しさと云つん。  
 無いので有つん。常に出社の度、宇治川の踏  
 切に立つて羨望する有る新橋行の列車。そ  
 ろも今自分の一家は乗つて有るの位と思ふ  
 と、隣の汽車の多く流出して有るの位有つ  
 ん。

ついで

A 10 20 書山 日記 昭和22年

